

模擬出前授業

えひめ学校・地域教育サポーターを活用して、子どもたちの豊かな学びや体験の充実を図ろう

「えひめ学校・地域教育サポーター」は、学校及び地域における教育活動に対して支援を行う企業、団体等です。子どもたちの豊かな学びや体験活動の促進を図ることを趣旨としており、現在、231の企業団体が登録しています。
(R.8.1月時点)

本制度に登録している企業・団体等のプログラムを体験♪

模擬出前授業として、社会福祉法人愛媛県社会福祉協議会のプログラムを参加者が体験しました。学校での福祉教育の実践事例を用いて、相手の立場になって考え、共感する力を身に付けるための取組を学びました。

そして、次の五つの企業・団体には提供プログラムの内容について詳しく説明していただきました。参加者は、自身の活動にどのように活用するか考えながら、熱心に耳を傾けていました。



個別ブース説明の様子

今回協力いただいた企業・団体

- 株式会社大石工作所（ものづくりの大切さ、SDGsの取組について）
- 西染工株式会社（染色などの専門的な技術について）
- 株式会社愛媛FC（プロスポーツに携わる仕事について）
- 仙味エキス株式会社（食品調味料、加工食品の最新技術について）
- 朝日共販株式会社（身近な食と自然環境について）

参加者の声

- 魅力のある企業や団体に、周りの人をやる気にさせるモチベーターとしての力を感しました。結局のところ、人の力こそが何かを成し遂げ形作るということを改めて実感しました。そういう人材を育てていくことが地域づくりになると思います。(教職員)
- 地元企業なのに知らないこともあったので、私自身もためになりました。地域づくりに取り組む職員たちにもよい情報が提供できると思います。(行政職員)

詳細はこちら

えひめ学校・地域教育サポーター

URL <https://ehime-kyoiku.esnet.ed.jp/shogai/tiikyoiku>



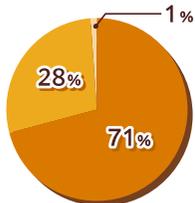
えひめ家庭教育サポート企業連携事業

URL <https://ehime-kyoiku.esnet.ed.jp/shogai>



参加者の提言

アンケートより…集い全体の感想



参加者314人の内訳



- 自分の困りごと・やりたいことを、声に出していえることが大事だと思いました。子どもたちの声を押し込めたり流したりせず、大切にしていけることで、思いを口に出せる子どもを育てていきたいです。(教職員)
- 希薄になる地域社会の中で、子どもに「最近どんな」「元気か」と声をかけてくれる大人を増やしていきたいです。また、そのような大人と子どもをつなげられる親でありたいと思います。(保護者)
- 子どもに地域がかかわっていく方法は、いろいろな角度から考えないといけないと感じました。学校から、地域からということではなく、子どものために何が出来るのかという視点で検討していきたいです。(行政職員)
- 子どもたちの未来に対して大人は責任を持つことが求められていると思います。しかし、決して過保護になるのではなく、羅針盤なき時代の航海を求められる子どもたちが自ら考え、行動していく土台を固めていくために必要な学びや体験の場を確保していくことが必要なのではないでしょうか。“たのしい”というのは心地よさだけではなく、困難や犠牲を超えた先に獲得できるものでもあることを伝えることが大人の責任ではないかと感じました。(教育施設関係者)



この集いは、県教育委員会が愛媛県幼稚園小中学校高等学校PTA連合会連絡協議会との共催で平成25年度から実施しており、今年度で13回目を迎えました。このリーフレット及び過去の集いの様子は右の二次元コードから御覧になれます。



発行 愛媛県幼稚園小中学校高等学校PTA連合会連絡協議会

問合せ 愛媛県教育委員会事務局社会教育課
〒790-8570 愛媛県松山市一番町四丁目4番地2
TEL: 089-912-2933 MAIL: shakaikyo@pref.ehime.lg.jp

主催：愛媛県教育委員会 共催：愛媛県幼稚園小中学校高等学校PTA連合会連絡協議会

(愛媛県国公立幼稚園・こども園PTA連合会、愛媛県PTA連合会、愛媛県高等学校PTA連合会、愛媛県私立中学高等学校保護者会連合会)

令和7年度
えがお愛顔でつながる
「学校・家庭・地域」の集い
開催レポート

令和7年8月7日(木)に愛媛県生涯学習センター及びえひめ青少年ふれあいセンターを会場に「令和7年度愛顔でつながる「学校・家庭・地域」の集い」を開催しました。

県内各地から、保護者、教職員及び教育支援関係者等314人が集い、講演や分科会等を通して、社会総がかりで愛媛の子どもたちを育むための方向性を探りました。

講演

講師

公益社団法人
チャンス・フォー・チルドレン代表理事

いまい ゆうすけ
今井 悠介 氏

すべての子どもに体験の機会を～体験格差の課題と解消に向けた取組～



現代の子どもが直面する問題

環境によって子どもの学びや人生の可能性が左右されてしまう「体験格差」問題を、私たち大人は見逃してもよいのでしょうか。子どもの相対的貧困の問題は、スポーツや文化芸術、野外活動などの学校外の体験機会にも影響することが、令和4年の全国調査の結果から明らかになりました。子ども時代の体験の有無は、自尊感情、想像の幅や将来の選択肢、他者とのつながりの機会にも影響し、体験格差が世代を超えて連鎖することで、貧困の再生産につながる可能性があると考えられます。

チャンス・フォー・チルドレンの取組

公益社団法人チャンス・フォー・チルドレンでは、「多様な学びを、全ての子どもに」という理念のもと、子ども自身が「何を学び、何を体験するか」を選択できる「スタディクーポン」事業や、コーディネーターが子どもの体験活動と地域をつなぐ「ハロカル奨学金」事業により、地域コミュニティの活性化を図るとともに、生育環境の違いに関わらず子どもが学びや体験にアクセスできる社会を目指しています。

社会全体で支える体験

体験は自尊感情や挑戦する力、将来の選択肢を広げるうえで重要な役割を果たします。スポーツや芸術、自然体験、人との出会いは、子どもが自分の興味や強みに気づくきっかけとなり、困難を乗り越える力を育てます。特に、信頼できる大人や仲間とのポジティブな体験は、逆境の中にある子どもの支えとなる大きな力になります。体験は子どもたちにとってだけでなく、もよいぜいたく品ではなく、全ての子どもに保障されるべき必需品です。子どもの体験や学びを家庭の責任に押し付けるのではなく、社会全体で支える仕組みを作ることこそが、これからの日本に必要なのです。

参加者の声

- 親の経済状況の違いによって、子どもたちの経験に差が生じてしまうことを、国や自治体、NPO法人が連携して解決しようとして取り組んでくれていることに感心したのと同時に、私も地域社会の一員として何かできることはないかと沸き上がる思いを感じました。(保護者)
- 子どもたちが選択できるような体制づくりを目指すことはとても大事だと思いました。何事も体験しないと、その後の発想も生まれないと改めて気づくことができました。(地域ぐるみ事業関係者)

分科会等 五つのテーマ別分科会等に分かれて、社会総がかりで子どもを育てる体制づくりについて協議しました。

第1分科会 「地域学校協働活動」

幅広い地域住民の参画により、学校と地域が連携して子どもたちを育てる体制づくりをどのように進めるか

発表者1 玉津小学校学校運営協議会

本校運営協議会は、年5回開催し、「正解はないかもしれないが、解答はある！」という思いを持ち、納得解を得られるよう熟議を重ねています。また、「玉津小ちよこっとボランティア」は、地域の方に「できる人ができるときに、無理なく楽しく」をモットーに参加していただいております。学校教育活動の支援や、地域人材育成を目指す体験活動に協力をいただいております。



一色 良氏

参加者の声

- 講演や推進員の方などの様々な立場の方々との交流を通して、実際の現場でのリアルなお話を聞くことができ、大変勉強になりました。様々な立場の方の様々な思いを共有し、地域と一体となって子どもを育てていくことが重要だと分かり、教師になれた際には、様々な方と協力してよりよい教育を目指していこうと思いました。(大学生)
- 地域が温かく学校を支えている様子をうらやましく思いました。学校は地域に根差したものであるべきだと思いました。(教職員)

発表者2 愛媛県立松山盲学校

「盲学校ってどんなところ？」まずは、県内唯一の視覚障がいのある幼児・児童・生徒のための学校を知ってほしいです。また、「点字ブロック啓発キャンペーン」は、盲学校を地域に開かれた学校にしたいという願いからスタートしました。街頭で呼び掛けを行った地元商業施設に協力してもらったりする中で、地域の方々とのつながりも生まれ、広がってきています。



沖田 栄江氏

助言

愛媛県CSアドバイザー 遠藤 敏朗氏

玉津小学校学校運営協議会の実践では、「ちよこボラ」が学校運営に非常に効果的に機能している姿が見えました。学校の先生には異動があります。だからこそ当該活動を地域主導（公民館）でやっていることが意義深いことです。また、一人一人のキャリアや将来に寄り添う盲学校の内部をぜひ一度、見てもらいたいです。そこに教育の本質があります。地域に向向していくことで社会・地域が変わるきっかけになるので、今後も地域に密着する活動を展開してもらいたいと感じました。「子育て」から「子育て」共同体（子どもたち自身が育っていく社会）を目指していきましょう。



第2分科会 「子どもの居場所づくり」

全ての子ども・若者が安心して過ごせる地域の居場所づくりをどのように進めるか

発表者1 トーキョーコーヒー四国中央

不登校をポジティブに捉え直し、子どもたちにとって安心できる第三の「居場所」を地域につくる活動を行っています。活動の基本は、大人が楽しむこと、できる人ができるときにできることをすること、そして失敗してもよいという姿を見せることであり、子どもたちが安心して過ごし、多様な大人と関わる中で、自然と学びや成長が生まれる場づくりを目指しています。



青木 千穂氏

参加者の声

- 共感することが多く、今日の日が、これからの自信とやる気につながりました。(民間団体関係者)
- 子どもにとって学校や家庭以外の第三の居場所がすごく大切だと感じました。大人は子どもに指導してしまいがちですが、そうではなく、「ただいてもいいよ」という安心できる心のよりどころがあることは大切だと思いました。(学生)
- 子どもをサポートするにあたり、子どもと大人の関係の築き方や、大人が余裕や余裕を持つことが大切だと感じました。(保護者)

発表者2 久米わくわくチャレンジサタデー

愛媛大学教育学部の学生が、公民館や小学校と連携し、月1回土曜日に活動しています。名刺交換を通じて子ども同士や大学生との関係性を築く授業、そして卒業文集作成を通じて書く力や自己肯定感を育む活動などを実施しています。この取組は子どもの「居場所」だけでなく、私たち大学生にとっても教育実践力や学びを深める貴重な「居場所」となっています。



高橋ひなの氏 杉野 美音氏
品川 航汰氏 藤村 小桜氏

助言

公益社団法人チャンス・フォー・チルドレン代表理事 今井 悠介氏

トーキョーコーヒーや大学生の実践に深く共感し、大人の楽しみや地域との連携の重要性を再認識しました。居場所づくりの鍵は、①地域との連携、②多様な子どもとの接続、③担い手育成の3点であり、理念共有と最低限のルールのバランスが連携の要となってきます。また、社会的困難を抱える家庭ほど参加が難しいため、福祉機関との連携も重要でしょう。経験を語ることで次世代が育ちます。多世代が協働できる環境を一緒に模索し、つくっていきましょう。



第3分科会 「子育て・家庭教育支援」

保護者と子どもを支え育む子育て・家庭教育支援の体制づくりをどのように進めるか

発表者1 NPO法人ぼちまる

看護師の経験から、不登校は早期支援で予防が可能であると考え、NPO法人ぼちまるを設立しました。訪問看護や学習サポート、学校との連携を通じて、病院受診前に専門的な支援を行っています。ゲーム・ネット依存傾向や発達特性を持つ子どもが増える中、親子関係の改善や家庭・教育現場・医療現場との協力、自尊感情の育成を重視し、地域全体で子どもを支える仕組みづくりを進めています。



出山 義洋氏

参加者の声

- 発表の両団体とも、親の不安や悩みに寄り添い、支える活動に取り組みされていました。子育てに悩む親の大きな支えとなってくださることに大きな安心感をいただきました。(教職員)
- 学校や幼稚園だけでなく、相談できる場があることを知り安心しました。もっとたくさんの人に知ってもらいたいし、子育て中の人、終わった人に関わらず、子育てについての情報を手軽に読んだり、聞けたりするところがあるといいなと思いました。(保護者)

発表者2 大洲子育てサポート “そよ風”

保護者支援を目的に元教職員や心理専門職を含む7人体制で、相談対応、出前講座、情報紙発行を柱に活動しています。相談は電話・来所・訪問の3形態で対応し、継続的な支援をしています。また、出前講座等は参加者同士のつながりや学びを重視して実施し、情報紙は毎月発行し啓発も続けています。今後も多様な悩みに寄り添いながら、保護者の心の居場所づくりを目指します。



祖母井規子氏 上杉 美保氏

助言

えひめこどもの城園長 敷村 一元氏

地域共生の視点で、子ども・高齢者・若者が共に支え合う環境づくりが求められています。地域には子育て・家庭教育支援に取り組む人が増えており、関係者がつながることが大切です。教職員を含めて、多様な大人がつながることが、子どもたちへの支援や将来への希望につながっていきます。子どもにとっての安心できる大人とは、真実に子どもと向き合い、話を聞いてくれる人です。子育てしやすい地域には、まずは「人」。そして、よい取組を継続するための「予算」が欠かせないでしょう。



第4分科会 「地域教育の担い手づくり」

子どもと地域をつなぎ、地域の学びを豊かにする人材の育成をどのように進めるか

発表者1 国立大洲青少年交流の家

ボランティアや体験活動に興味・関心のある青少年を対象に、全国28施設での活動が可能となる法人ボランティアへの登録に向けたボランティア養成講座を開講しています。そして、学生中心の法人ボランティアが自主企画等の企画・運営を担う活動を実施しています。今後も多くのことを学び、体験できる機会を創出することで、社会で活躍できる青少年の育成を目指していきます。



岡本 和也氏

参加者の声

- 学生ボランティアを育成することで、人手の解決、学生の体験、子どもと若い世代の交流ができており、いつながりができていました。また、公営塾が居場所づくりになっているのも、とてもおもしろいと思いました。(行政関係者)
- 高校生の居場所がなかなかないため、地域で関わる取組が今後のロールモデルになると感じました。(公民館関係者)
- 家庭、地域、学校が相互に連携しながら、地域の宝物である子どもを育てている社会になればいいと思います。(地域ぐるみ事業関係者)

発表者2 鬼北町公営塾

鬼北町公営塾（通称：お鬼塾塾）は北宇和高校の在校生を対象に、学習サポートや体験活動の実施、居場所の創出を主な目的として創設されました。そして、現在、鬼北町と連携して北宇和高校の魅力化を推進するとともに、地域活性化に向けた取組を行っています。高校生が様々な人と関わることで信頼関係を築き、様々なことに携わり、ともに育まれることで、地域社会の担い手となってくれることを願っています。



浅越 聖光氏

助言

新居浜市生涯学習センター所長 関 福生氏

地域教育とは、子どもたちの未来をよりよいものにしていくために、家庭、学校、地域社会が一体となって取り組む三位一体の活動と言えます。VUCA（予測が困難）の時代において、子どもたちが主体的・対話的な深い学びを実践するためには、大人の関わり方が重要です。最近私はAAR（Anticipation, Action, Reflection）サイクルの大切さを実感しています。まずは「わくわく」の期待から始め、実践、振り返りを循環的に行うことで、活動の質を高めていくのはいかがでしょうか。

